

奥村正雄

山西省の洞穴暮らし6年半

侵略の聞き書きを続ける女性65歳

たかだか年に1回、希望者を伴って1泊2日の方正地区日本人公墓訪問を続けている80歳翁・小生の感傷など、吹けば飛ぶような軽さに思えてくる。これは、それほど心に重くのしかかる本だ。大野のり子編『黄土地上来た日本人—中国山西省 三光政策村の記憶—』である。

今から8年前、北京留学中だった著者は延安から北京へ戻る夜行寝台バスが深夜、秋の長雨のために流出した大量の土砂のために行く手を阻まれ、脱出のために疲労困憊の果て、たどり着いたのが黄河沿いのこの村、山西省臨県招賢鎮だった。そこは何と日本が侵略戦争中、あの三光作戦を繰り広げた、村人にとっては1000年の恨みを日本に抱く因縁の地域である。2005年6月、意を決した彼女は、黄河を見下ろす磧口李家山村に単身転居、以後、今日までこの地の窑洞（山腹に掘った横穴）で生活しながら、日本侵略時の犠牲者の聞き書きを続けているのだ。

彼女がこの聞き書きをまとめた『記憶にであう—中国黄土高原 紅棗がみのる村から—』（未来社）を本誌前号の書籍案内で紹介したが、このほど、この詳細なレポート（中文）が東京大学東洋文化研究所から出版された。ただし今回は中国語版で市販はされず、全国の大学や図書館、研究所などに寄贈されている。たとえば千葉県では千葉大学、県立図書館、成田仏教図書館など。千葉県立中央図書館ではまだ整理ができてなくて貸し出しができず、館内閲覧ができる、という段階。大野さんは「いずれ日本語版を出したい」と言っている。

この大野さん、実は今年6月に私たちが方正を訪ねる時、ぜひ同行したいと言っていたのだが、残念ながら実現できなかった。この時のメールでのやり取りの一節「あなたが80歳なら、私もあと15年、頑張らなければなりません」がいま私を支える一つになっている。ちなみに彼女は1947年愛知県生まれ。